

注文の多い料理店

真澄先生指導

第一次指導 第一時

(始まりの挨拶まで、用具の準備を指示したり、子どもを落ち着かせるように穏やかに話をする)

- それじゃあ、ご挨拶をしましょう。おはようございます。おはようございます。

- とつても澄んだ、気持ちのいいご挨拶ね。みんなの気持ちが素直で、明るくていい五年生だなということが伝わってきます。これから、今日、明日、明後日と三日間、注文の多い料理店の勉強をします。とつても楽しみにしてきました。一緒に頑張りましょうね。

〈区画〉

- お返事もいいのね。それじゃあね、本を、プリントを開いてください。(子どもたちは、下巻のカラーコピーを使う。) これをね、みなさんに読んでもらいますが、長いですから切ります。番号を打ちますから番号を書いてください。一番はね。六ページの「二人」というところが、一番です。(以下同様に一〇番までつける)

1	p 6 L 4	二人の	2	p 8 L 3	風が
3	p 9 L 8	そして	4	p 11 L 1	ずんずん
5	p 12 L 2	ところが	6	p 13 L 10	また黒い
7	p 15 L 1	少し行きます	8	p 16 L 9	すると
9	p 18 L 9	おくの方には	10	p 21 L 10	部屋は

- 十人の人に読んでもらいます。読む順番は決まっていますか。決まっていない。じゃ、今日は、先生が言いますね。後ろから行きますね。(左から右に順番を決めていく)

一 よむ

- さあ、これから読んでもらいますが、読む時は、後ろの先生方にもよく聞こえるようにするに、立って、大きな声でゆっくり読んでください。次の人は、もうちょっとで自分の番だという時に、立って準備をしていてください。いい。

- 本当に返事のいい、気持ちのいい五年生だね。一番の人から読んでください。聞く人は、お勉強がよく分かるようにするには、きちつと本を持って、…。そう、いい姿勢だね。その姿勢が、勉強がよく分かるのね。素晴らしい。どうぞお願いします。(五分経過)

(全員、元気よく、落ち着いて読む)

- よかったね。それでは、本を置いてください。
- よく分かるように読んでくださいとお願ひしたら、本当によく分かるように、それもね、気持ちを込めて読んでくれましたよ。聞く人も大変立派でした。(二六分経過)

二 とく

- さあ、それでは。(題を板書する)
- 注文の多い料理店というお話ですけれども、この料理店はどこにありましたか。分かったら、サツと手を上げて…。あつ、すごいね。どうぞ。山の中。

- そう、ものすごい山の中なのね。専門の猟師でも迷子になっちゃう。それから、白熊のような犬が泡を吹いて死んでしまう。ちよつと普通の山ではないような気がするんですけどね。何の料理を食べさせますか。西洋料理です。

- 宮澤賢治さんいたところに西洋料理を食べるといふのは、普通の人はなかなかできなかったんだって。まあ、お金持ちだね。主人は誰ですか。山猫の親分です。

- 山猫の親分です。普通は、注文するのは、誰ですか。

お客さんです。

○ ところがね、この料理店の注文は誰がするの。

山猫の親分です。

○ 注文を出して、来たお客を食べてしまう。恐ろしい話ですよ。その料理店にお客としてやってきたのは誰ですか。

二人の若い紳士です。

○ 二人の若い紳士の絵を見てごらん、七ページ。みんながあまり見ないような恰好をしていますね。この紳士はどこから来たのですか。

東京です。

○ 東京はね、今でも大きな都会ですが、その頃も、日本の中心になるところだったんだね。紳士の格好をよく見て、何しに来たんですか。

狩りに来た。

○ 鉄砲を押さえてごらん。こんな帽子かぶってね。何の恰好ですか。

イギリスの兵隊の恰好です。

○ 恰好もすごいでしょう。大変なお金持ちなんでしょう。この絵には描いてないんだけど、東京から連れてきたものがあつたでしょう。

ええと、白熊のような犬を二匹連れて…。

○ 今買えばね、一頭が二、三百万するの。この紳士がレストランの中に入つていったら変だなあと思つたことがあつたでしょう。二つあつたの。

たくさん戸がある。

○ そう、素晴らしいね。今の、聞いた。一枚じゃないんだよ。たくさん戸があつたの。どんどんどんどん、戸が出てくるのね。これも変だがね。まだ変だなあ。目に入つたの、もう一つない。

戸に字が書いてある。

○ 戸に字が書いてあつたでしょう。山猫の親分が書いた注文がね、ここにあつたんですよ。だから、この注文を最後までずうつと聞いたら、どうなつちやうの、二人の紳士。

あの、食べられてしまいます。

○ でも、食べられなかったか。

食べられなかった。

○ 食べられなかった。でも、来た時よりうんと変わったところあつたでしょう。

顔がくしゃくしゃになった。

○ 顔が、紙屑みたいになつたの。命だけは助かつたんだけど、まあそれだけ、恐ろしい目にあつたんだね。どうしてこんな目にあつたのかなあ。

〈手引き〉

○ 山猫の親分は、二人の紳士を料理して食べるために仕掛けを考えた。いきなりガブリというわけにはいかないのでしよう。その仕掛けが、注文に書いてあるの。1番のところを出してみてください。

(二六分経過)

### 三 よむ

### 四 かく

○ 十人で読んでもらつたので線を引きますね。(板書 横一線と区画線)

○ 1のところは、注文はないから○をしておきます。(板書 ○)

○ 2番のところ、ふつと後ろを見たら何があつたの。

一軒の西洋造りの家

西洋料理店。

○ 西洋料理店があつたでしょう。(板書 西洋料理店)

○ 3番から注文が書いてあります。全部書くと大変なので、注文の中から、山猫の親分がこうしてほしいということを簡単に書いてほしいのね。

みんなで作ってみるね。3番、最初の注文のところ出してみなさい。

○ 「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はいりません。」さ

あ、その中の何という言葉。

お入りください。

○ それもあるねえ。それもあつた。

決してご遠慮はいりません。

○ それもある。

どなたもどうかお入りください。

○ その中の…。(板書 どなたも)

○ 「どなたも」を、先生は考えました。もう一つ。これが表側の仕掛けだったね。この裏側に、仕掛けがあったでしょう。「ことに太った方や若いお方は大歓迎いたします。」そうすると、この中のどこがねらい。

ことに太ったお方。  
若いお方。

○ みんなもお肉食べる時そうでしょう。固いよりやわらかいのがおいしい。  
(板書 太ったお方ややわらかいお方)

○ 4番は「当店は注文の多い料理店ですから、どうかそこはご承知ください。」その中で、知ってほしいっていうのは、何。

先生、あそこは、やわらかいお方でなくて、若いお方です。

○ あっ、そうか。ご免ね。先生が若い人は柔らかいと勝手に思ってしまった。(会場笑いに)ご免、ご免。ありがとうございます、教えてくれて。

(板書修正)

○ そうすると、一番大事なことは、そこはどうかご承知ください。

○ いいとこ見つけてます。何を承知してもらうの。  
注文の多い。

○ 注文を分かってほしいのね。(板書 注文)

○ 裏側の「注文はずいぶん多いでしょうが、どうかいちいちこらえてください。」は、どれ。  
どうかいちいちこらえてください。

○ そう。(板書 こらえて)

○ ちょうどいい時間になったので、5番からはお家に帰って、仕掛けたんだなというところを、ノートに書いてみてください。そして、明日また、このところを勉強していきましょう。

○ 今日は、とってもいい勉強。これ、二学期に入ってお勉強なのね。だけど、一学期終わってすぐのところ、よくこれだけの長い文章を読んで、考えたなあって思います。素晴らしい五年生で、担任の先生も嬉しいね。きっと、自慢でしょう。終わります。

(礼)

(四六分経過)

## 第一次指導 第二時

(児童が着席、準備の指示、始業の合図を待つ)

○ 朝のご挨拶をしましょう。おはようございます。  
おはようございます。

○ お家に帰って読んでみた人、手を上げてごらんください。  
(全員挙手)

○ ああ、やっぱりそうなんだね。すごいね、全員そろって。そして、手の上げ方が素晴らしい。指の先まで伸びているでしょう。いい手だね。手を降ろしてください。

○ 家へ帰って、注文のところを、5番のところから考えてごらんさいと話をしておきました。それを見せてもらおうと思うので、昨日書いたところのノートを開いてください。

○ みなさんのノートを見せてもらいますので、その間、注文の多い料理店を目で読んで、黙読といいますが、待っていてください。

## 三よむ

(師 ノートを見て回る。弟 黙読) (五分経過)

○ それでは、本を置いてください。今、お家でのお勉強を見せていただきましたが、とってもよく考えて書いてきてくれましたね。もう、嬉しくなりました。昨日よりもっとよいお勉強ができそうね。先生も、昨日帰ってから一生懸命考えてみました。それを黒板に書いてみるので、その間、みなさんは黒板を見ながら待っていてください。先生が書いたのと、自分が書いたのと違ってあるかもしれないけれども、決して自分を消しゴムで消したりしない。みなさんが一生懸命考えたことが大事なのね。先生が一生懸命考えたことも大事なの。

## 四かく

○ 4番までは、一緒にしましたね。(板書 直線と区画 番号)

○ 1番は、ものすごい山の中で、注文は何にもなかったから、○でしたね。そして、西洋料理店が…。

(板書 2の西洋料理店から10の○まで)

○ こう、先生は考えました。よい姿勢で、待っていてくれましたね。背中で見んなの本気を感じてました。

○ そうしたらね、机の上の物は、全部たたんで机の中に、さっとしまひ  
しましょう。(机上整理) (二七分経過)

## 五 よむ

(次の順番の児童)

○ 落ち着いて読んでくれましたね。

## 六 とく

○ この料理店、ずっと前からそこにあつたの。  
違う。

○ 違うね。いつからあつたの。はい。

○ 紳士が、ふつと後ろを見ると、あつた。  
その前に何かがあつたでしょう。だから、ふつと後ろを見た。

○ 風だと思いません。  
風がどうと吹いてきて、ふつと後ろを見たら、それはそれは立派な料理店だった。何ていう名前。

西洋料理店山猫軒。

○ (板書 風 山) 山猫軒という名前です。軒というのは、家という意味です。だから、お客さんを西洋料理にして山猫が食るお家っていう意味。恐ろしいね。その山猫は、今、何番のところにいるんですか。どこで待っている。

ええと、9番。

○ ここで、フォークとナイフを持って、大きな舌を出して、今か今かと待っている。ここまでお客を連れてこないといけない。その仕掛けは何ですか。

先に、注文の多い料理店と…。

○ 表にも裏にも書いてある。その注文が、(1)(2)(3)から(1)(2)(3)(4)(5)までですね。(板書 括弧) 注文の中で紳士が一番喜んだところは何番。

○ 3番の太ったお方や若いお方だと思います。

○ 太ったお方や(太に傍点) 若いお方。(わかに傍点) もう一つ。  
どなたも。

○ どなたも。(どなたに傍点) ただで食べさせてあげますに、大喜びしました。最初に、二人の紳士に自分でさせた仕事は何ですか。  
体にクリームを…。

○ 一番最初、何した。  
髪の毛を整え、泥を落としました。

○ 一番最初は、髪を整えて、履物の泥を落とさせました。(傍点) 喜んでそうしたのね。その次には、何した。

○ 鉄砲と玉を置いてくださいといいました。  
鉄砲、玉を置いた。(5と6の下の方に括弧を付けて) 何をさせたいんですか。

○ 食べるのに邪魔なものをとらせる。

○ まず、邪魔なものを上手にとり、(7と8の下に括弧を付けて) 7番と8番の仕事は何。

○ 二人の紳士に、クリームを塗ったり味をつけたり…。

○ 味をつけさせた。お仕事の中で、おかしいなと思ったのは、どれ。  
塩を塗るところで、少しおかしいなと思って…。

○ 塩を体に塗るってことはどうなるの。  
最後の味付けです。

○ だから、塩を塗るために裸にならねけりやいけないでしょう。さすがにここまで来ると、この注文は何をするための注文だったと気付いたの。

○ ええと、山猫に食べられるための準備。

○ それが分かったら、どうしますか。  
びっくりして逃げようとした。

○ そう。逃げられましたか。

逃げられませんでした。

○ 逃げられませんでしたね。どうして逃げられなかったの。

○ 戸を開けようとしたら開けられなかった。

○ 一分つて三ミリ、三ミリも動かなかった。どうなるの。

○ 山猫に食べられちゃう。

○ うん。食べられちゃう。何の料理にされる。

○ 西洋料理。

○ 西洋料理の何。いろいろある。

○ サラダやフライになる。

○ (板書 サラダ) サラダにされちゃう。前へ進むとどうなるの。

○ 食べられてしまいます。

○ 「おなかにお入りください」っていうのは、部屋の中を、丁寧に言っている。もう一つは、何かの中に入ることか分かる。

○ 皿。

○ 皿に載って、何の中に入るの。

○ 山猫の親分のお腹の中。

○ (板書 腹) 腹という意味もあるのよ。二人はどうした。

○ 泣いていた。

○ 泣いたね。ただ泣いたんじゃないよね。

○ 声もなく泣いたんじゃないかと思えます。

○ 声が出ない、あんまり怖くて。泣いて泣いて震えた結果、どうなった。

○ 顔がくしゃくしゃに丸めた紙のようになりました。

○ そうね。顔が、紙屑みたいにくしゃくしゃになったの。ところが、その時、二人を助けてくれたでしょう。誰。

○ 白熊のような犬が二匹、二人を助けに来たんだと思えます。

○ 二人が助かったときに、西洋料理店はどうになりましたか。

○ 煙のように消えました。

○ 煙のように消えてなくなつたでしょう。それ何番。

○ 確か、10番だと思います。

○ 自信持って。一〇番だよ。その時に、不思議なことが、またあった。

何があった。

○ また、風がどうと吹いたんだと思えます。

○ (板書 風) ここの風はね、どうつと吹いて、西洋料理店が煙のように消えてしまった。こつち(2)の風はね、西洋料理店が現れて、不思議でしょう。もう一つ、風が吹いたところがあるの。

○ 五番の髪を揃えて、履物の泥を落とそうとした時に、ええと、?。

○ ブラシが置いてあったでしょう。そのブラシが、消えたんだよ、突然風が吹いて。なんだか変だねえ。ここでも風が吹いているの。(板書 風)

○ 変だなあとということが、たくさんあるでしょう、考えてみれば。二人

○ の紳士は、何で、そこに気がつかなかったんだらうね。(挙手する児童

○ 有り) すごいなあ。分かっているんだ。じゃあ、それを明日勉強しよう。明日、また、しっかり手をあげて発表してね。他の人も、必ずわかるから大丈夫よ。

○ ここのところは(1)山の中だからこうね。(板書 括弧) すごいですねえ、この難しい、長い話をよく分かったよ。

## 七よむ

○ みんなで声に出して読みます。大きい声でしっかり読んでください。良い姿勢です。

(指音読 張りのある声で読んでいく) (三九分経過)

○ 何分に終わりですか。(進行係に確認)

○ じゃあ、時間が少しあるので、教科書だけ出してください。次の終わりの合図が鳴るまで読んでからおおうと思います。合図があったら、そこで終わりにしますね。あなたからね。一番。あなたが二番。三番、という風にしていきます。途中で終わったらごめんなさいね。立つて大きな声で読んでください。はい、一番のところからどうぞ。

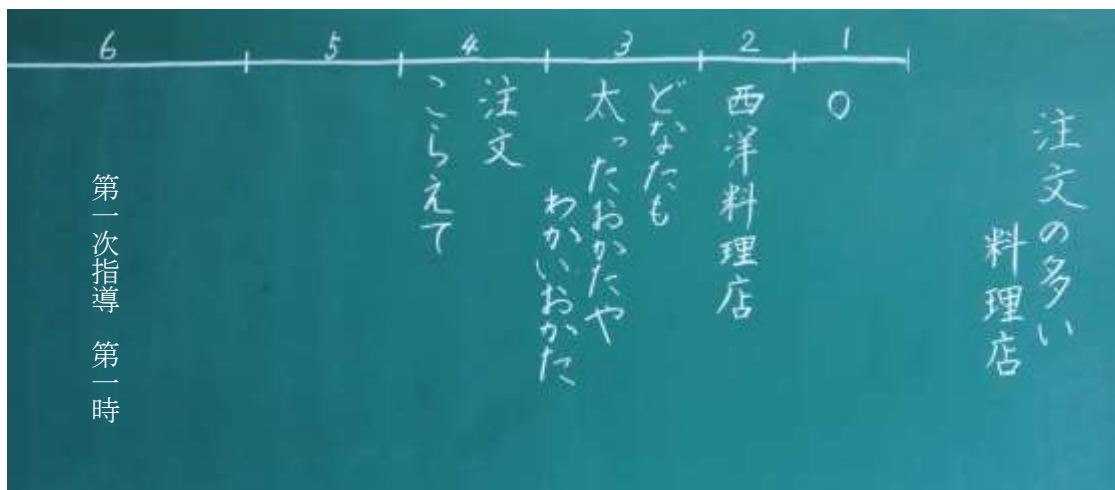
(四番まで、四名とも張りのある声で読む)

○ ちょうどいいところで切れましたね。明日は、あなたからになります。本当によく頑張りました。終わりましたよ。

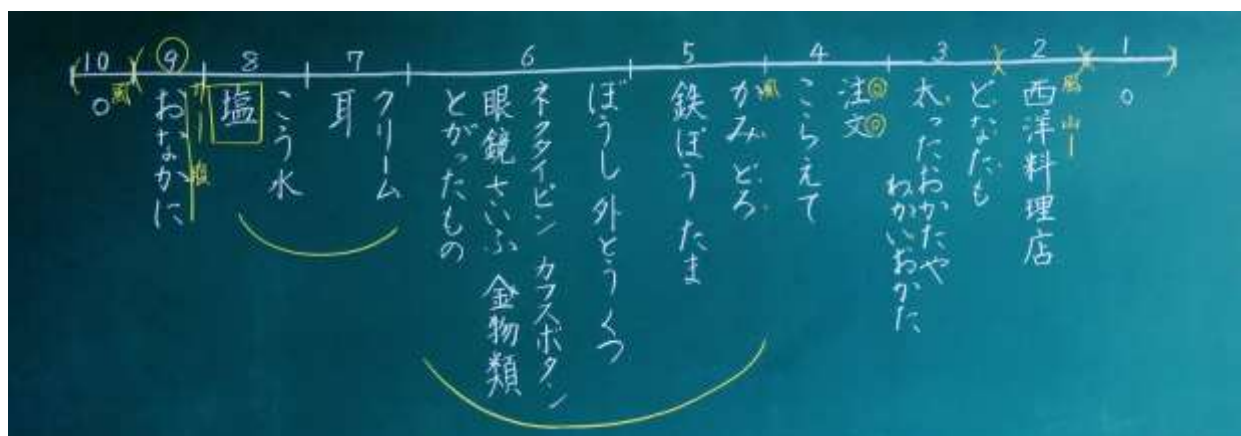
(礼)

(四五分経過)

第一次指導 第二時 ↓



第一次指導 第一時



第二次指導 第一時

- (児童着席し、準備を始める)
- じゃあ、ご挨拶をしましょう。おはようございます。  
おはようございます。
- ご挨拶の声がいい声になりました。お勉強本気でやって来た声です。注文の多い料理店、今日最後の授業になりました。読んでみましょう。昨日、お家に帰って読んでみた人、手を上げてごらんください。  
(全員挙手)

一 よむ

- 今日は、全部は読まないで、半分だけ読んでもらいます。今日、読む人は、あなたからでしたね。そうすると、あなたが一番、二番、三番、四番、五番、そこまで読んでください。あなたは、黒板を読んでもらいます。  
(五名とも、しっかり読み終える)

- 落ち着いて、よく考えている読み。こういう読みができるようになる、勉強がうんとできるようになる。素晴らしいねえ。(二〇分経過)

二 とく

- 二人の紳士は、いかにも東京からやって来たなということが一目で分かったでしょう。どういうところが分かった。  
東京の店だつて…、裏通り…。
- 紳士を一目見て、この人田舎の人じゃないなあって、どこで分かった。  
紳士がイギリスの兵隊さんのような格好をしていたから。
- 狩りをしに来たのに、とつてもお洒落しているでしょう。ネクタイ締めたりカフスボタンしたりして。(カフスボタンの補説)
- 兵隊さんのハイカラな格好を、みんなにどうしてほしいの。  
そういう格好を見せて、褒めてもらいたい。
- 自慢しているの。もう一つ自慢するものがあつたでしょう。何。

鉄砲だと思いません。

○ そう、それもある。連れていたは。

白熊のような犬です。

○ 白熊のような犬ね。この犬の何が自慢なの。

白熊のような、汚れていなくてきれいな犬。

○ そうね、それも自慢ね。まだあるんだよ。

その犬の買った値段が高いことが自慢。

○ 高い犬なんだぞっていうのが自慢なの。その証拠にね、犬が気を失って泡を吹いて死んじゃったでしょう。紳士はその時にどうした。

ううんと、買った分の値段、を損した。

○ 損したって言ったでしょう。命よりもお金のことを考えるの。自分の格好ばかり考えるの。それを見て、しめしめと思っただのが、誰ですか。

山猫の親分です。

○ 山猫の親分ですよ。しめしめどうしてやろうと思っただ。

料理して食べてやろうと思っただ。

○ そのためには、仕掛けが要った。その仕掛けに何をしたんですか。

ドアに注文を書いた。

○ 表にも裏にもたくさん書いたでしょう。 (板書 注文)

○ 仕掛けは、注文だけじゃなかったのよ。こういう人が引つかかるようにね、小道具を使ったの、お芝居みたいに。例えばね、あの玄関、考えてごらん。白い瀬戸の煉瓦を組み合わせたすごい立派な玄関。その頃、

そんなのあまりない。どんな戸だった。

ガラス戸の戸だと思いません。

○ ガラス戸の素敵な戸。おまけに金色の字が書いてあったでしょう。この他にも、例えば、味付けをした部屋を思い出してごらん。お部屋の前の方に何が置いてありました。クリームが入っていたの何

壺です。

○ ガラスの壺なの。高いんだよ、香水が入っていたのは何

金ピカの香水入れ。

○ 金色でピカピカの香水の瓶なの。紳士は好きだろうね。塩は、何に。

ええと、青い瀬戸の、塩壺。

○ 瀬戸の塩壺って有名で高いんだよ。立派な小道具がいっぱい置いてあるもんだから、二人の紳士は、ころりつと騙されたんだね。

○ 紳士は、これまで、こんな山の中、どんなとこって思っていましたか。

山の中と思っただけでいいよ。

○ 獣一匹とれないからって、怪しからん山の中だと言っただけで馬鹿にしとったでしょう。ところが、立派なレストランが出てきた。こういうレストランって、東京にたくさんあるの。あるか、ないか。

ない。

○ めったにない。そういう所へ来るお客さんって、どんな人だと思う。

お金持ちの人。

○ そう。お金持ち……。もうちょっと、どういう言い方が分かるかな。

貴族の人です。

○ お金持ちでも、ただのお金持ちじゃあないんだよ。身分の高い人。例えば、貴族のような。その偉い人がやって来る所だと、考えたのが、ここに出てくるのだけれど、何番のところ。 (各自 探す)

〈手引き〉

○ 五番のところを出してみなさい。そのところにね。偉い人が来るんじゃないかなあ、と紳士が考えた所があるの。今日は、そこを書いてお勉強します。注文があるでしょう。五番の最初の注文、指で押さえてごらん下さい。「お客様がた、ここでかみをきちんとして、それからき

物のどろを落としてください」。このこと、次に、紳士が二人でお話しているでしょう。「これはどうももつともだ。ぼくもさつきげんかんで、山の中だと思っただけでいいよ。もう一つ、「作法のきびしいうちだ。きつと、よほどえらい人たちが、たびたび来るんだ」。注文の所の

鉤括弧とお話のところの鉤括弧の印がちよつと違いますから、そこを気を付けて書いてね。二つお話が出てくるから、お話を続けないうちにね。

一つのお話が終わったら、次のお話は、上から書いてください。

(二三分経過)

三 よむ  
四 かく

(一斉に書き始める)

○ もう書いた。早いね。(板書を確かめた後、机間指導)

○ しつかり書いてありました。今度黒板を見てお勉強しますから、全部しまってください。机の上は、全部空にします。(三五分経過)

五 よむ

○ 次、あなたね。立って、大きい声で読んでください。

(しつかり音読する)

○ 落ち着いてよく読んだね。

六 とく

○ 分からない言葉ありますか。

(板書 見くびったに傍点)

○ 見くびったってどういうこと。

甘く見ている。

○ うまい言い方したね。馬鹿にしているってこと。それで、作法ってマナー。

○ うまいこと言ったね。ここではお食事のマナーね。(傍点を付けながら) うちって、何のうち。

ええと、うちというのは…。

○ ここでは何。

山猫軒の店のことをいいます。

○ お料理店のこと、山猫軒のことね。

○ これは、山猫の言ったことね。(板書 山)これは、(しと二か所に板書しながら)紳士の言ったことに分けますね。こっちは山猫。こっちは紳士です。(板書 縦棒と括弧)

○ 紳士の方を見て考えますね。紳士、都会から来た人だなあとというのが

分かる言葉あるの、何。

見くびったという言葉です。

○ ここ。(傍点を○で囲みながら)こんな山の中大したことないやっというね。もうこれで、都会から来たというのがよく分かるよね。

○ そこで、山猫は、二つ注文を出しました、何。

髪をきちんとして…。

○ 一つは、髪を、きちんとすること。(板書 傍線と1)

それから、履物の泥を落とすこと。

○ 履物の泥を(傍線)落とすこと。(板書 2)山の中だと思って、馬鹿にしなさんなど。ちゃんあんと、こういうところは厳しいんだよ。

○ それで、この注文を見て、紳士が喜んじやったんだよ。何に喜んだの。喜んだ言葉がある。

自分たち以外に偉い人が…。

○ 今、言った中の、何という言葉。

よほど偉い人。

○ そう、よく見つけたな。嬉しいね。(板書 傍○)

○ この注文を聞いてね。偉い人、それも一人じゃないよ。どこで分かる。

えらい人たちがの、「たちが」という所だと思います。

○ (よほどの傍○を二重に)よっぽど偉い人が何人も。もう一つ嬉しい言葉は。

たびたび来るといふ所だと思えます。

○ (傍点)一回じゃないんだよ、度々来るんだよ。

○ そういう人たちと一緒にあって、食事をする。そうすると、周りの人が、二人を見た時に何て思うんだろう、二人の紳士のこと。

うんと、偉い人たちとか、思われる。

○ 偉い人だあって、思われると、紳士は考えたんだねえ。そうして、紳士は、注文というのを勘違いしたんです。何だと思ったの。ここの中の言葉で漢字二文字。分かった。先生、今朝気がついた。

作法です。

○ その通りです。脱帽だな。ありがとう。(傍線)作法だと、思ったん



だよ。作法が厳しい。そう思ったから、山猫の出す注文が、どんどんどんどん増えても、ああ、作法が厳しいんだって言うとおりにした。とうとう顔がくしゃくしゃになった。元に戻った。

戻らなかった。

○ 何をしても戻らなかったでしょう。あなた達、気をつけないとこういうことになるよって、山猫は、教えているんだよ。怖いよだけれど、どこか抜けてて、愛嬌があると思う。(会場に笑い)先生、今日ね、白い字で書いたでしょう。本当は何色。覚えている、何色だったか。

赤。

○ (板書 赤) 赤で書いてあったんです。赤い色ってどういう意味。信号なんかでも考えてみると、赤って何を教えているの。

赤とか、注意とか、そういう意味かなと思いました。

○ ここで、山猫が、わざわざ危ないよって教えたのに、二人の紳士は、わあ、偉い人が来るんだあ、作法が厳しい家だあ、と喜んでいたら大変なことになった。命は助かったからよかったけれど、東京へ帰って、毎朝鏡でくしゃくしゃな自分の顔を見て、一体何を考えるんだらうねえ。(会場に笑い)それは、みなさんの宿題だ。聞いてみたいと思うけど。

○ あと、九番のものすごく恐ろしい目にあつたところは、担任の先生と一緒に勉強してください。(四四分経過)

## 七 よむ

(指音読 張りのある声で読む)

○ うまいねえ。先生が山猫のところを読んで、みんなは、紳士のところを読んで。「お客様方、ここで髪をきちんとして、それから、履物の泥を落としてください。」(続いて、張りのある声で読む)

○ うまい。それでは、女子の人、注文のところをやつて。あなた、この紳士をやつて。あなたは、この所をやつて。先生、鞭はしないけど。

(役割分担で、少しつかえたが、しっかりと読む。)

○ うまい。最後、劇までやつてもらいました。

○ 非常に楽しい三日間でした。ありがとうね。みなさんと会えてお勉強ができてうれしかったです。夏休み、長いですが、体に気を付けて、二学期、また元気に学校に来てください。

はい。

○ じゃあ、終わります。 (礼)

(児童のお礼の挨拶)

(四六分経過)

